

# 広島平和教育研修 富士見中学校2年生 5名



「生きたい」と叫びながら、消えていった人の「無言の痛み」と「無念の怒り」。亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げるとともに、負傷された方、またご家族の方々に心から深くお見舞い申し上げます。



8月5日から7日まで、富士見中学2年生5名（引率教諭1名）が「広島平和研修」を実施しました。

この研修で平和祈念式典への参列、平和祈念資料館見学のほか、被爆者の方から体験談を伺うなど、平和学習を深めてきました。

参加者5名が、この研修を通じて体験した「想い」を紹介します。

広島研修で特に印象的だったのは資料館です。展示物の写真撮影中、余りにも悲惨でもう撮れない、撮つてはいけないのでないかと感じました。でもこれを撮らなくては原爆の本当の恐ろしさを伝えることができないと思い、平和の尊さを訴えるためにも強い気持ちと使命感でシャッターを押しました。初日に見た原爆ドームからは、物凄い破壊力なんだと感じましたが、体験者の話を聞き、資料館の見学後に見たドームからは六十八年前の生々しい地獄の光景が重なって見え、身震いするほど恐ろしく強烈なショックを受け全く違うものに見えたのです。このまま広島に留まり、証言者の方々と共に戦争の事実を伝えていきたいとまで思いました。

帰宅して私は家族、祖父母、親戚、友達に自分が見聞きし感じたことを写真を見せながら話しました。核兵器は絶対持つてはいけません。私の役目はもう始まっています。

証言をしてくださっている時、恒松さんはすごく苦しそうな表情で話をしていました。そんな姿を見て、そんなに辛いことなのになぜ話をし続けていくのだろうと思いました。しかし考えてみると、ここで証言を聞いた人が次の人に話し、その人がまた次の人に話す。このように輪が広がっていく、一人でも多くの人が平和について考えられるからだと思いました。

僕はあの日から目を背けずに、平和であり続ける大切さを伝えたいと思いました。

「証言のつどい」での被爆者の恒松さんの話です。恒松さんは、十四歳で被爆されたそうです。話を聞いていて気になつた言葉がありました。「ガラスの破片による傷に気が付いたのは、しばらく経つてからだつた。」という言葉です。

出来た傷にすぐに気付かなかつたということは、それどころではないことが起きたという原爆の威力を物語っています。



今日の聞き手は  
明日の語り手  
富士見中学校2年  
伊藤里桜



広島研修で  
学んだこと  
富士見中学校2年  
名取駿馬



私は、広島研修に行つてきて印象に残ったことはたくさんあります。その中でも、平和祈念資料館は感じるものが多くありました。

資料館では、原爆で被害にあつた広島の人々の苦しみなどが伝わってきました。

皮膚がただれ、全身に傷があつてさまよつていた人々を再現した人形や、禎子さんの千羽鶴、亡くなつた人々の遺品や髪の毛など、本物はとても生々しく、何があつたのかを教えてくれました。

どれだけの人が原爆で苦しみ死んでいったか、「生きたい」と思ひながら死んでいったか、そしてどう戦い続けているか、などを知ることができました。

ただけの人が今でも病気や過去と感じたこと、分かつたことなどを自分の言葉で伝えたいです。

私は、広島研修に行つてきて印象に残ったことはたくさんあります。その中でも、平和祈念資料館は感じるものが多くありました。

資料館では、原爆で被害にあつた広島の人々の苦しみなどが伝わってきました。

皮膚がただれ、全身に傷があつてさまよつていた人々を再現した人形や、禎子さんの千羽鶴、亡くなつた人々の遺品や髪の毛など、本物はとても生々しく、何があつたのかを教えてくれました。

どれだけの人が原爆で苦しみ死んでいたか、「生きたい」と思ひながら死んでいたか、そしてどう戦い続けているか、などを知ることができました。



「ヒロシマ」  
富士見中学校2年  
名取あや香



広島研修に行き、一番印象に残つたことは出会つた皆さんとの平和に対する姿勢です。

六十八年前に落とされた原爆や戦争について、どのようにしたら伝わるか今もなお真剣に考え、一生懸命活動している姿に驚きました。

六十八年前の出来事を過去の事として終わりにしないその姿勢が、広島が今もしている平和への訴えなんだと思いました。

原爆ドームを核兵器に対する戒めとし、もう二度と同じことが起きないよう、原爆や戦争の真実を伝える姿を見てることができ、大変良い経験になりました。

私もこれから、白鈴祭の場を通して、多くの人々に広島の平和を伝えたいです。



▲研修報告会の様子

今回の研修で、私はたくさんのことを学ばせて頂きました。その中でも特に印象が深かったのは被爆者の証言です。

私がお話を聞いた方は、当時、今の私たちと同じ年齢でした。その方は静かに目に涙をためながら話してくれました。その話の惨さに聞くことがとてもつらく、涙をこらえるのが大変でした。

「私は死んでいった家族の分まで生きなければ・・・」そんな話を聞き、改めて人に伝えていく大切さを感じました。

だんだんと風化していき、原爆の恐ろしさ、惨さ、悲しみを忘れ同じことがまた繰り返されぬよう、多くの人に伝え、どれだけ時間が過ぎようが絶対に忘れない社会作りに貢献したいです。

最後に、今回広島研修に行かせていただき本当にありがとうございました。



今の姿

富士見中学校2年  
坂本季実子



風化させない  
原爆の恐怖  
富士見中学校2年  
大日方裕実